詩経国風
書経

橋本　循　訳
尾崎雄二郎他訳

世界古典文学全集

筑摩書房

詩経国風　書経　　世界古典文学全集　第2巻

昭和44年 4月15日第1刷発行

訳　者　橋本循
尾崎雄二郎他

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町 2—8
振替東京4123　電話（291）7651
郵便番号　101—91

CS 20302

大盂鼎（上は銘文拓本）

罍 （白鶴美術館蔵）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

詩経国風

目次

橋本循訳

周南

9 関雎
11 葛覃
13 卷耳
14 樛木
15 螽斯
16 桃夭
17 兔罝
18 芣苢
19 漢広
21 汝墳
22 麟之趾

召南

24 鵲巢
25 采蘩
26 草虫
27 采蘋
28 甘棠
29 行露
31 羔羊
32 殷其靁
33 摽有梅
34 小星
35 江有汜
36 野有死麕
38 何彼穠矣
39 騶虞

邶風

40 柏舟
42 緑衣
43 燕燕
45 日月
46 終風
48 擊鼓
49 凱風
50 雄雉
52 匏有苦葉
53 谷風
57 式微
58 旄丘

簡兮 59
泉水 61
北門 63
北風 64
靜女 65
新台 66
二子乘舟 68

鄘風

柏舟 70
牆有茨 71
君子偕老 72
桑中 74
鶉之奔奔 75
定之方中 76
蝃蝀 78
相鼠 80
干旄 81
載馳 82

衛風

淇奧 86
考槃 88
碩人 89
氓 91

竹竿 95
芄蘭 97
河廣 98
伯兮 99
有狐 100
木瓜 101

王風

黍離 103
君子于役 105
君子陽陽 106
揚之水 107
中谷有蓷 108
兔爰 110
葛藟 111
采葛 112
大車 113
丘中有麻 114

鄭風

緇衣 116
將仲子 117
叔于田 118
大叔于田 120
清人 122

羔裘 123
遵大路 124
女曰雞鳴 125
有女同車 127
山有扶蘇 128
蘀兮 129
狡童 130
褰裳 131
丰 131
東門之墠 133
風雨 134
子衿 134
揚之水 136
出其東門 136
野有蔓草 137
溱洧 138

齊風

雞鳴 141
還 142
著 143
東方之日 144
東方未明 145
南山 146
甫田 148

魏風

盧令 149
敝笱 150
載驅 151
猗嗟 153

唐風

蟋蟀 155
山有枢 156
揚之水 157
椒聊 159
綢繆 160
杕杜 161
羔裘 163
鴇羽 165
無衣 167
有杕之杜 168
葛屨 170
汾沮洳 171
園有桃 172
陟岵 173
十畝之間 174
伐檀 176
碩鼠 176

葛生 177
采苓 179

秦風

車鄰 181
駟驖 182
小戎 184
蒹葭 187
終南 188
黄鳥 189
晨風 191
無衣 193
渭陽 194
權輿 195

陳風

宛丘 197
東門之枌 198
衡門 199
東門之池 200
東門之楊 201
墓門 202
防有鵲巢 203
月出 204
株林 205

沢陂 206

檜風

羔裘 208
素冠 209
隰有萇楚 210
匪風 211

曾風

蜉蝣 213
候人 214
鳲鳩 216
下泉 218

豳風

七月 220
鴟鴞 224
東山 229
破斧 233
伐柯 234
九罭 235
狼跋 236

書経

尾崎雄二郎・小南一郎
中島長文・中島みどり 訳

虞書
堯典 第一 241
舜典 第二 246
大禹謨 第三 255
皐陶謨 第四 262
益稷 第五 265

夏書
禹貢 第一 271
甘誓 第二 281
五子之歌 第三 282
胤征 第四 284

商書
湯誓 第一 289
(夏社、疑至、臣扈) 291
(典宝) 291
仲虺之誥 第二 291
湯誥 第三 294
(明居)
伊訓 第四 297
(肆命、徂后) 297
太甲上 第五 299
太甲中 第六 300
太甲下 第七 302
咸有一徳 第八 303
(咸乂四篇、伊陟、原命) 305
(仲丁、河亶甲、祖乙) 307
盤庚上 第九 307
盤庚中 第十 308
盤庚下 第十一 312
説命上 第十二 315
説命中 第十三 317
説命下 第十四 319
高宗肜日 第十五 320
西伯戡黎 第十六 322
微子 第十七 324

周書
泰誓上 第一 325
泰誓中 第二 328
泰誓下 第三 331
牧誓 第四 333
武成 第五 335
339

洪範 第六 344
（分器） 354
旅獒 第七 354
（旅巢命） 356
金縢 第八 356
大誥 第九 361
微子之命 第十 367
（帰禾） 369
（嘉禾） 369
康誥 第十一 369
酒誥 第十二 377
梓材 第十三 383
召誥 第十四 385
洛誥 第十五 390
多士 第十六 398
無逸 第十七 403
君奭 第十八 407
蔡仲之命 第十九 414
（成王成） 416
（将蒲姑） 416
多方 第二十 416
立政 第二十一 422
周官 第二十二 427
（賄肅慎之命） 430
（亳姑） 430
君陳 第二十三 431
顧命 第二十四 433
康王之誥 第二十五 439
畢命 第二十六 442
君牙 第二十七 445
冏命 第二十八 447
呂刑 第二十九 448
文侯之命 第三十 456
費誓 第三十一 458
秦誓 第三十二 460
解説 詩経国風 橋本循 463
書経 尾崎雄二郎・小南一郎 466

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

詩經國風

凡例

一　本書の本文は朱熹の詩経集伝の監本に拠った。

二　本書に参引した書名は簡に従うて左のように略号を用いた。

○毛詩草木鳥獸蟲魚疏　呉、陸璣撰（陸疏）
漢、毛亨伝（毛伝）
○毛詩正義　漢、鄭玄箋（箋）
唐、孔穎達疏（孔疏）
○毛詩本義　宋、欧陽修撰（本義）
○詩総聞　宋、王質撰（聞）
○詩緝　宋、厳粲撰（厳緝）
○詩経集伝　宋、朱熹撰（集伝）
○呂氏家塾読詩記　宋、呂祖謙撰（呂記）
○続呂氏家塾読詩記　宋、戴溪撰（続呂記）
○詩集伝名物鈔　元、許謙撰（名物鈔）
○毛詩原解　明、郝敬撰（原解）
○詩経世本古義　明、何楷撰（古義）
○詩経説約　明、顧夢麟撰（説約）
○欽定詩経伝説彙纂　清、康熙勅撰（彙纂）
○詩経稗疏　清、王夫之撰（稗疏）
○毛詩稽古篇　清、陳啟源撰（稽古篇）
○毛詩訂詁　清、顧東高撰（訂詁）
○詩経通論　清、姚際恒撰（通論）
○虞東学詩　清、顧鎮撰（学詩）
○読風偶識　清、崔東壁撰（偶識）
○詩貫　清、張叙撰（詩貫）
○毛詩識小　清、林伯桐撰（識小）
○毛詩通攻　同、同（通攻）
○毛詩伝箋通釈　清、馬瑞辰撰（通釈）
○毛詩後箋　清、胡承珙撰（後箋）
○毛詩説　清、荘有可撰（説）
○詩説考略　清、成僎撰（詩説考略）
○詩地理攻略　清、尹継美撰（攻略）
○毛詩伝疏　清、陳奐撰（伝疏）
○毛詩多識　清、多隆阿撰（多識）
○学詩詳説　清、顧広誉撰（詳説）
○学詩正詁　同、同（正詁）
○経伝釈詞　清、王引之撰（釈詞）
○経義述聞　同、同（述聞）
○詩経原始　清、方玉潤撰（原始）
○毛詩学　民国、馬其昶撰（学）
○詩経通解　民国、林義光撰（通解）
○詩経釈義　民国、屈万里撰（釈義）
○詩経新注　本邦、山本章夫撰（新注）

周南

むかし虞・夏の際に后稷（名は棄）というものがあり、これが周の始祖である。その後裔の公劉が豳（陝西栒邑県付近）に都し、八世の古公亶父（周の太王）に至って岐山の南の周（陝西岐山県付近）に国を遷した。これを岐周という。その孫の文王のとき周から豊（陝西鄠県）に徙る。そこで今までの岐周の故地を分けて周公旦と召公奭の采地とした。召も地名で、これは周の内の別名である。周公旦は文王の子、武王の弟であり、召公奭も周と同姓で姫氏である。周・召二公は太王から文王に至る先公たちの教をそれぞれの采地に施し、その徳化が遠く南国にまでも行われ、それが民俗にあらわれた詩がすなわち周南、召南の詩であると旧来説かれてきたのである。朱子は「周の国から集めた詩とその上に南国の詩を交えとって居産といい、南方の国国から出た詩だけをあつめて召南という」と説いているが、これは「南」という字を説明しようとしたものであろうが、今一つ言わんと欲するところが明瞭でない。崔東壁は「これは周公と召公が侍を分ち、おのおの風謡を集めたもので周公の采めたものが周南、召公の采めたものが召南というだけのことだ。かつ周公の子は世世周公であり、召公の子は世世召公であって、それらのものの采めた詩も含まれているのである。『南』とは詩の一つの体で、本は南方に起ったもので、北人がまねしたものをも南と名づけた。楚詞をまねしたものを総じて楚詞と名づけるようなものだ」と説いているが、これも今一つ隔靴掻痒の感を免れない。結局朱子も崔東壁も「南方から出た詩」とか「南方の詩」ということを「南」の一字から引き出しているのである。この「南」の一字に就ては古来種種なる説明が行われてきたが徹底的な結論は得られない。この点に於て近人鄭賓于氏の中国文学流変史に言うところは大に参考とするに足るものがある。次にその大略を記す。

それは鄭玄の「詩譜」に「周・召は禹貢の雍州岐山の陽の地名にして今は右扶風美陽県に属す」とある。山の南を陽といい水の北を陽という例によれば鄭氏が岐山の陽というのは岐山の南のことである。岐山の南は漢水・汝水・潁水・江水の在るところで楚国の北部の地である。故に周・召二地の南はすなわち岐山の南で、すなわち楚の地である。

又、鄭樵の「通志」の昆蟲草木略の序に「周は河洛を為め、召は雍岐を為めた。河洛の南は江に瀕し、雍岐の南は漢に瀕する。江漢の間が二南の地で、詩の起った所はここである。屈宋以来、騒人辞客、多く江漢に生じた。故に仲尼は二南の地を以て作詩の始とした」という。

さらに、宋の林艾軒（名光朝字謙之）が「与宋提挙一書」に「周召以南の国、江・漢・汝墳の如き小国何ぞ数えん。其風土有する所の詩は並に之を二南に見る。則ち詩の萌芽は楚人之を得たりと為す、又一変して離騒となる」とある。以上の説によって二南が楚風であることは明かである。いわゆる周南、召南はいずれも周公や召公の徳化が南国に及んだという意味のものではなくして、周より以南の地に於て、また召より以南の地に於て採集した詩であるという意味である。

○關雎　全三章

ここに一人の君子――それは諸侯か大夫――があって、みずから良き配偶者を求めている。その際の哀楽の情を、詩人が代って写したものであろう。

一

關關雎鳩　在河之洲
窈窕淑女

関関たる雎鳩は　河の洲に在り
窈窕たる淑女は

君子好逑　君子の好逑なり

通釈　雌雄相応じて和鳴する関関たる声は雎鳩の鳴声であって、それは川の中の洲から聞えてくるのである。（それにつけても思い興すことがある。）奥ふかく物閑な家庭に育った貞潔専一な処女こそ、この君子の好き配偶者として相応しいのである。

語釈　○関関。「毛伝」には和声なりといい、「集伝」には之を敷衍して雌雄の鳥が相応ずるの声とする。すなわち、なごやかな相鳴きの声、またその形容。○雎鳩。「毛伝」に王雎なり、鳥摯にして別ありという。摯は一に鷙とかく。猛禽のこと。王雎はあらき鳥であるが雌雄の間にけじめがあって行儀がよいということである。そこで「爾雅」の郭璞の注には雎鳩を以て鶚とする。鶚は和名みさごといい、たか、はやぶさの類で猛禽である。又、鵰の類ともいう。これも、まだか、大わしのことで猛禽である。いずれも他の鳥や動物を打ちたたいて捕える鳥である。故に鷙というのである。また水上を翔けめぐって魚を攫んで食うので食魚鷹ともいう。（「蹙緝」参考）○河。「集伝」に支那の北方では流水を河という、必ずしも黄河のことだけではない。○洲。「毛伝」に水中の居るべきものをいう。川の中のす、しま、なぎさ。○窈窕。「毛伝」に幽閒なり。奥ふかく物しずかなこと。そうした家庭に育ったことをいう。○淑女。淑は「毛伝」に善なり。「箋」に貞専の善女という。みさお正しく心専一の女。「集伝」に女は未だ嫁がないものの称という。○君子。「偶識」に諸侯や大夫の通称という。○好逑。「毛伝」に逑は匹なり。よき配偶者、よき相手のこと。

窈窕淑女
寤寐求之
求之不得
寤寐思服
悠哉悠哉
輾轉反側

窈窕たる淑女
寤寐之を求む
寤寐思服す
悠なる哉悠なる哉
輾転反側す

通釈　水辺には荇という野菜が或は長く或は短く参差として生えている。それを流れに従うて或は右に行き或は左に行って摘み取る。（それにつけて思い出すことがある。）何とかして奥ぶかい物しずかな貞潔専一な良家の処女がないものかと、寝ても寤めても之を求めることを忘れない。これを求めても求めることができないので、寤めても寝てもこのことばかり思いつづけている。この思い、この心配は常に絶え間がないので、たとえ寝たとしても、輾転反側ばかりして、とっくりとはねむれないのである。

語釈　○参差。「集伝」に長短斉しくない形容。○荇菜。荇という野菜。水辺に生ず。「集伝」に荇は接余のこと。根は水底に生じ、茎は鈒の股の如し。上は青く下は白し。葉は紫赤にして円く径は寸余、浮んで水面に在りという。○左右流之。左右とは「集伝」に或は左し或は右し、一定の方角なきこと。流は「毛伝」に求むるなり。水の流に順うて取ること。○寤寐。寤は覚める、寐は寝ぬる。ねてもさめても、いつもかもの意。○思服。服は「毛伝」に之を思うなり。二字とも思い懐うこと。○悠哉。「詩緝」に思の長きことという。○輾転反側。「蹙緝」に輾転は二字ともに臥して廻り動くこと、反側は臥して正しからざること。

二

参差荇菜
左右流之

参差たる荇菜
左右之を流む

参差荇菜　　参差たる荇菜
左右采之　　左右之を采る
窈窕淑女　　窈窕たる淑女
琴瑟友之　　琴瑟之を友まん
参差荇菜　　参差たる荇菜
左右芼之　　左右之を芼ぶ
窈窕淑女　　窈窕たる淑女
鐘鼓樂之　　鐘鼓之を楽まん

通釈　水辺には荇という野菜が、長く短く、参差として生えている。それを左へ行き右へ行き、流れに従うて取る。（それにつけても思い出すのであるが）奥ぶかい物閑な良家に育った貞潔専一な処女を、君子の配偶者として求め得たならば、君子と淑女とが朋友の如く親しむことは琴と瑟との音調の和するようであろう。さてさて長短斉しからざる荇という野菜をば、右にゆき左にゆき、流れに従うて、その美なるものを択び取るのであるが、そのように奥ぶかい物しずかな良家の貞潔な処女を求め得たならば、君子と淑女とは心なごやかに相楽しみ相親しむことは、鐘と鼓との二つの楽器の音調が少しのくるいもなく合するようであろう。（何とかして、こういう淑女をさがし出したいものである。）

語釈　○采。取る。○琴瑟友之。「集伝」に琴は五弦、或は七弦、瑟は二十五弦。みな琴の種類。友之とは「厳緝」に之を親しむこと朋友の如し。「詩貫」に始め合して和すること琴瑟の調を同じゅうするが如し。君子と淑女が朋友のように親しむことは琴と瑟との音調の相合するようである。○芼。「毛伝」に択ぶなり。「詳説」に広く采ってその美なるものを択び取る。○鐘鼓楽之。鐘はかね、鼓はつつみ、楽とは「集伝」に和平の極という。君子と淑女の心なごやかに相親しみ楽しむことは、鐘と鼓との音調の合して異なるところなきが如きをいう。

葛覃　全三章

身分の高い家の娘の結婚前後の生活とその心境とを描いた詩である。

一

葛之覃兮　　葛の覃びて
施于中谷　　中谷に施る
維葉萋萋　　維れ葉萋萋たり
黄鳥于飛　　黄鳥于に飛んで
集于灌木　　灌木に集い
其鳴喈喈　　其の鳴くこと喈喈たり

通釈　葛の蔓が延びて谷中を這い廻っている。その葉は萋萋と茂り盛えている。黄鳥は飛んで簇り生えている灌木の上に集り、その雌雄相応ずるの鳴声は喈喈として聞えてくる。（暮春の渓山の景物である。）

語釈　○葛。草の名。「毛伝」に葛は絺綌をつくるもの。和名、くずかつら。○覃。「毛伝」に延なり。○兮。音調を強めるときに用いる助辞。○中谷。「毛伝」に谷中なり。○于。に。句中の助辞。於、乎に通ず。○施。「毛伝」に移なり。○維。これ。意味のない発語の助辞。○萋萋。「毛伝」に茂盛の貌。○黄鳥。「毛伝」には搏黍なり。「厳緝」に黄鶯なり。関西では鸝黄という、其色は鶯黒で黄であるという。和名、ちょうせんうぐいす。○于。ここに。発語の助辞。於、曰と同じ。○灌木。「毛伝」に叢木なり。「孔疏」に木の簇り生ずるを灌となす。○喈喈。「毛伝」に和声の遠く聞えること。雌雄相応ずるなごやかな

相鳴きの声の形容。

二

葛之覃兮　葛の覃びて
施于中谷　中谷に施る
維葉莫莫　維れ葉莫莫たり
是刈是濩　是れ刈り是れ濩て
爲絺爲綌　絺と為し綌と為し
服之無斁　之を服して斁うこと無し

通釈　葛の蔓が延びて谷中に一ぱいになっている。その葉は莫莫として茂り、盛り、もう十分に成長した。そこでこの蔓を刈り、これを煮て繊維となし、それを績いで布となす。上等のものは絺となし、粗末なものは綌となす。このようにしてできたものであるから、われは之を服用して、いやになったり、そまつにしたりはしないのである。

語釈　○莫莫。「毛伝」に成就の貌というは、「孔疏」によれば葛が成長して既に取りて用うべきほど茂盛しているという意味。○濩。「毛伝」に之を煮るなり。「孔疏」に葛を煮て以て絺綌を為るとあり。○絺綌。葛布、かたびらのこと。「毛伝」に精を絺といい、麤を綌という。細い葛糸のかたびらを絺、あらい葛糸のかたびらを綌という。○服。「通釈」に服用の義という。○斁。「毛伝」に厭うなり。

三

言告師氏　言師氏に告げらる
言告言歸　言言に帰ぐを告げらる
薄汚我私　薄らく我が私を汚い
薄澣我衣　薄らく我が衣を澣がん
害澣害否　害れか澣ぎ害れか否ざらん
歸寧父母　帰ぎて父母を寧んぜん

通釈　（以上葛の蔓で葛布を作り、いよいよ結婚ということに進んできた。）そこで、われは、わが教育係の女師から、いろいろ婦徳、婦言、婦容、婦功（しごと）のことにつき教えられ、そして、いよいよ嫁ぐことになったことを告げられた。そこで衣服の整理をなさねばならぬ。努めてふだん着の垢を洗い落し、或は努力して式服の垢を濯わねばならんが、さてどの着物を濯うべきか、どれは洗わないでもよいかと丹念に撰択せねばならぬ。ともかく夫の家に嫁いで、里の父母の羞をのこさぬように、そして父母の心を安心させねばならぬ。

語釈　○言告師氏。「毛伝」に言は我なり、師氏は女師なり、古えは女師が婦徳・婦言・婦功を教えた、「箋」に我女師から教え告げられた、我に教え告げるに人に適くの道を以てす。○言告言帰。「伝疏」に言帰の言は曰にと訓ずる、発語の助辞。帰は「毛伝」に婦人が嫁ぐことをいう。○薄。後に出てくる周南の芣苢の詩の「毛伝」に薄は辞なりとあり、助辞となす。ただ「稗疏」によれば、薄には勉める、努めるという意味がある。助辞も漫然と加えるのでなく、それぞれ意あって用いているのであるという。○汚。「毛伝」に煩なり。「伝疏」に煩は垢を洗うことをいう。○私。「毛伝」に私は燕服なり。ふだん着のきもの。○澣。「箋」に之を濯うをいう。○衣。「集伝」に礼服なり。式服のこと。○害。曷と音通、「毛伝」に害は何なり。何れをか。何をか。○否。不と同じ、否定の辞、然せず。○帰寧父母。「通釈」にこの帰は反るという意ではなく、婦人の嫁ぐことを帰というの意である。寧は安んず、寧父母とは婦人が嫁いでから、夫の家にて父母の羞を遺すことのなきよう、父母の心を安神させること。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com